

2022年12月

第147号

ぱれっと



(株)北日本ベストサポート
TEL 018-883-1888

COP27(国連気候変動枠組み条約第27回締約国会議)閉幕

COP27は11月6日からエジプトで開催され18日閉幕予定であったが2日間延長されて20日に閉幕した。

途上国の長年の悲願だった地球温暖化による「損失と損害」に対して支援基金創設について先進国側が歩み寄る形で合意に達した。具体的な内容は今後委員会を設置して討議を深めることになったが、対象を「最も脆弱な国」に限るとなっており、支援対象国の線引きや各国の拠出額などの具体策はこれからの課題となっている。

今回の会議では産業革命前比平均気温を1.5度以下に抑える目標や石炭火力発電の段階的削減など改めてもり込まれたものの、ロシアのウクライナ侵略に伴うエネルギー危機で後退も懸念される。また、気温上昇を1.5度の目標実現するためには、産業革命以降、二酸化炭素(CO₂)の排出枠は2兆8千億トンで、うち2兆4千億トンが排出されたと言われており、残された排出枠は4千億トンに過ぎない。世界の年間排出量は400億トン程度で10年間で目標枠を超えてしまう恐れがあり、極めて厳しい目標となっている。温室効果ガスの代表的なものは、二酸化炭素(CO₂)で、主に化石燃料(石油、石炭、天然ガス等)を燃焼させることにより発生する。私たちの生活に欠かせない電気を作るために大量の化石燃料が使用されている。私たちの生活のため電力やエネルギーが大量に消費され地球温暖化に密接につながっており、また、森林の伐採による土地開発などでも二酸化炭素の増加に影響を与えていると言われている。

今年はパキスタンで集中豪雨が長期間に亘って続き国土の3分の1が冠水する洪水となり、アフリカでは熱波のため記録的な干ばつに見舞われ、島嶼国では海水が上昇することによる水没の危険に晒されている。排出量は世界首位の中国、2位米国、3位インド4位ロシアの順となっているが新興国や発展途上国でも世界の排出に占める割合が3分の2を占め、これらの国々の対応が今後の焦点となりそうだ。

日本では昨年2050年には温室効果ガスの排出を実質ゼロとするカーボンニュートラルを目指すことを宣言し取り組んでいる。日本政府は会議の席上、長年の自然災害で培った防災の技術やノウハウを発展途上国に提供するプランを表明した。集中豪雨の発生を予測し、住民に通知する警戒システムの仕組みは多くの国での活用が期待される。

太陽光発電や風力発電の取り組みも活発化しており、原子力発電所の稼働期間延長も検討されている。資源に乏しい日本にとって苦しい選択が迫られている。

人間の燃焼力

ある目的に向かって長い年月燃え続けるということは、全生物を通じても人間だけにしかできないすばらしいことである。

それには、深い精神的生命と、その世話をするすばらしい脳がなければできないからである。

そういう意味では、同じく燃えるにしても、意識的に目的に向かっての人間の燃え方は、全宇宙の中でもまったく人間独特のもので、こういう燃焼力を与えられた人間に生まれたとは、なんとありがたいことか。

情熱



人間が燃えるとは、自主的精神的に、その夢とか希望に向かって精進することである。

しかし、その燃え方は、性格や目的や年齢などにより多種多様である。一般的に、若人は激しく、老人は静かだが、これも人により、とりどりである。

何よりもたいせつなことは全情熱を持ってことに当たることで、激しいほうがよいとか、静かなほうがよいなどということではなく、春の海のような親鸞やミレーのような燃え方もあれば、嵐のような日蓮やベートーヴェンのような燃え方もある。

美しい死

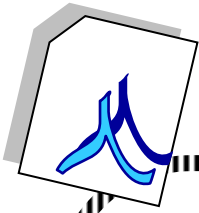


良寛の「裏を見せ表を見せて散るもみじ」には、またこの人ならではの落ちつきと美しさがある。

人生の最期にまっかなもみじ葉の如く燃え、秋の日に映えて、裏を見せ、表を見せながら、一段とあたりに美を添えて散る姿—ここまで来ると、死ももはや悲しみとかさびしさとかいうものではなく、大自然の美の一面でしかない。

死をここまで深く、美しく見得るとはなんたることであろうか。

ねりあげられた人にとっては、ただ動物的の苦とか楽とかがあるだけでなく、苦しみの中には慰めもあり、喜びもあるのである。



志賀 潔 (日本の医学者・細菌学者)

- | | |
|-------------------|---|
| 1871年2月7日(明治3年) | 現仙台市に、仙台藩士の子として生まれた。姓は佐藤、幼名は直吉。 |
| 1878年(明治11年) | 母親の実家である志賀家の養子となり、名も潔と改めた。志賀家は仙台藩の藩医を務める家柄であった。 |
| 1892年(明治25年) | 宮城中学(現、宮城県仙台第一高等学校)、第一高等中学校を経て帝国大学医科学大学(現、東京大学医学部)入学。 |
| 1896年(明治29年) | 大学を卒業し、大日本私立衛生伝染病研究所に入所。北里柴三郎に師事。 |
| 1897年(明治30年) | 赤痢菌を発見し、「細菌学雑誌」に『赤痢病原研究報告第一』を日本語で発表。 |
| 1898年(明治31年) | 要約論文をドイツ語で発表。これにより、赤痢菌の属名は志賀に因んで Shigella とされた。 |
| 1899年(明治32年) | 内務省技師・伝染病研究所第一部長となる。 |
| 1901年(明治34年) | ドイツ・フランクフルトに留学しパウル・エールリヒに師事。 |
| 1905年(明治38年) | 帰国、医学博士号取得。脚気細菌起源説否定。 |
| 1920年(大正9年) | 慶應義塾大学医学部教授に就任。同年秋朝鮮総督府医院長、京城医学専門学校長。 |
| 1929年(昭和4年) | 京城帝国大学(現・ソウル大学)総長となる。 |
| 1931年(昭和6年) | 内地に戻り、北里研究所顧問に就任。 |
| 1957年1月25日(昭和32年) | 老衰のため死去。享年85歳。
仙台市による市葬。
文化勲章。正三位勲一等を受賞。 |

オススメの BOOK



1日1話読めば心が熱くなる 365人の「生き方の教科書」

監修者 藤尾 秀昭 出版社 致知出版社

本書は「致知出版社」が実業家・思想家・作家・アスリートなど広い分野で活躍された方々、および、現役で活躍されている人たちの「人生どう生きるか」、「自分は何を目標として生きてきたか」、あるいは「自分の心の根底で自分を支えているものは何か」など、「人生の指針」が示されており、これからの自分の生き方についてヒントを与えてくれる貴重な一冊だ。

秋田県出身の盛岡で事業展開しているシリウスの佐藤幸夫代表の事業への「闘魂」も掲載されている。姉妹品に「365人の仕事の教科書」がある。

カーボンニュートラル 実現のために私たちがができること

2020年10月、政府は2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする、カーボンニュートラルを目指すことを宣言しました。この実現に向けて、世界が取り組みを進めており、120以上の国と地域が「2050年カーボンニュートラル」という目標を掲げているところです。

COP27が閉幕し、基金の具体的内容は引き続き議論を重ねていくことになったものの、今後のカーボンニュートラルを推進していくには良い弾みとなったと思います。

人類がこの地球で住み続けるために、持続可能な社会の実現に向けわたしたち一人一人がいまできることをもう一度見直してみましょう。



ひとりひとりができること

ゼロカーボン アクション30

脱炭素社会の実現には、一人ひとりのライフスタイルの転換が重要です。
「ゼロカーボンアクション30」にできるところから取り組んでみましょう！

エネルギーを節約・転換しよう! 1 再エネ電気への切り替え 2 クールビズ・ウォームビズ 3 節電 4 節水 5 省エネ家電の導入 6 宅配サービスをできるだけ一回で受け取ろう 7 消費エネルギーの見える化	太陽光パネル付き・省エネ住宅に住もう! 8 太陽光パネルの設置 9 ZEH (ゼッチ) 10 省エネリフォーム 窓や壁等の断熱リフォーム 11 蓄電池 (車載の蓄電池) ・省エネ給湯器の導入・設置 12 暮らしに木を取り入れる 13 分譲も賃貸も省エネ物件を選択 14 働き方の工夫	CO2の少ない交通手段を選ぼう! 15 スマートムーブ 16 ゼロカーボン・ドライブ	食ロスをなくそう! 17 食事を食べ残さない 18 食材の買い物や保存等での食品ロス削減の工夫 19 旬の食材、地元の食材でつくった菜食を取り入れた健康な食生活 20 自宅でコンポスト
環境保全活動に積極的に参加しよう! 30 植林やゴミ拾い等の活動	CO2の少ない製品・サービス等を選ぼう! 28 脱炭素型の製品・サービスの選択 29 個人のESG投資	3R (リデュース、リユース、リサイクル) 24 使い捨てプラスチックの使用をなるべく減らす。マイバッグ、マイボトル等を使う 25 修理や修繕をする 26 フリマ・シェアリング 27 ゴミの分別処理	サステナブルなファッションを! 21 今持っている服を長く大切に着る 22 長く着られる服をじっくり選ぶ 23 環境に配慮した服を選ぶ

【編集後記】

最近コロナ感染者が増加傾向となっており、第8波の流行の拡大が懸念されている。加えて、インフルエンザが例年以上に流行するのではないかとの声が医療関係者の間からも聞かされることも多くなっている。

私たちは、長い期間同じような状況が続いてくると次第にそれに慣れてきて、状況を具体的に把握せずに安易に行動しがちになる。ここは、もう一度状況確認を行い大事に至らないように油断することなく気を引き締めて事に当たるようにしたいものである。